虹

藤井重夫

藤井重夫

文藝春秋新社

〈著者略歴〉
兵庫県豊岡市出身。大正5年生れ豊岡商業卒。文芸首都に〝高架線〟を発表以来，小説を執筆。応召して四年間中国で転戦。16年朝日新聞入社，南方特派員，学芸部記者等を経て，34年退社，執筆に専念。26年〝佳人〟で芥川賞候補，40年〝虹〟で第53回直木賞受賞
現住所　東京都世田谷区羽根木2—9—19

昭和40年9月25日　発行
定価　370円

虹

著作者　藤井重夫
発行者　上林吾郎
発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西8の4
振替東京 78743

印刷所　凸版印刷
製本所　加藤製本

©SHIGEO FUJII　Printed in Japan

目次

虹 7
風土 79
善界 109
世染 149
あとがき 204

装幀　田村孝之介

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

虹

その街をよく知っている人たちは
　この話を信じまいけれど
その街を少しも知らない人たちは
　この話を信じないでくれ

Mein Märchen

虹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

ジャンジャン横丁の串カツ屋で、カズヒコが下寺町一迎寺の坊主にとッ捕まり、交番に突きだされた話を聞くまで、順一は、カズヒコが、トックリの儀ィやんに誘われてお墓荒しの仲間に加わっていたことを、しらなかった。

仲間は六、七人いたらしいが、カズヒコだけが逃げそこねたのだそうな。

一迎寺の坊主は、年寄りの寺男まで狩りだして四、五日まえから、新世界一帯の串カツ屋、

飲み屋などに張りこんでいた。カズヒコは運がわるかったし、新米だけに要領もよくなかったのだ。

客のいる鼻っ先で、串カツ屋のおやじに、「おっちゃん、竹の串、いらんか」

と、やった。束ねて古新聞に包んでいたのを、さしだした。

その手を、いきなり横あいから、つかまれた。

つぎのあたったシャツにズボン、下駄ばきというのは、この界隈で見かけるただの身なりだが、青くまるめた頭が尋常の客ではないとカズヒコが気づいたときには、あとの祭りだった。

そのまま、カズヒコは関西線のガードのそばの、交番へ引ったてられた。

「とうとう捕まえましたワ。こんなチビめが、えらい悪るさをしよってからに。……お彼岸で、仏はんもせっかくお墓の花立てが新しゅうなった、ええぐあいや、と喜んでなはったのを、こいつらが片っぱしから抜いて行きよりましてン。……花立ての竹筒が無うなるのンは、まえまえからのことで、はじめは子どもらのテンゴかいな、思うとりましたが、テンゴにしてはチと度が過ぎるよってに、寺男が朝の起きぬけから墓場をパトロール…へえ、その巡回というやっですナ…そいつをやっていたところ、裏の崖のこわれた土塀のとこから、こいつらが二人、三人と徒党を組んで、ウチのお墓へ忍びこみ、そこいらにあるお墓の花立てを手あたりしだいに

引っこ抜いて去(い)による現場、三日つづけて目撃しましてン。……ところが、なんし寺男ちゅうのンは、ヨボヨボの爺さんですやろ、すばしっこい子どもらの足に追いつけず、いつもお墓荒しを見つけながら、よう捕まえずじまいやったのですワ。……お墓の花立ての竹筒が、串カツ屋の竹の串に化ける、ちゅう話を聞いて、ほいで先日からこっち方面へ張りこみに出てきておったのンですが、おかげさんで、とうとう問題の、お墓荒しをこのとおり、とっ捕まえることがでけました。どうぞ、よう調べてやっとくれやす、この子を。」

まるで口馴れたお経をよむように、坊主は交番で、一気にしゃべった。

二人いた巡査の、若いほうが、苦笑しながら、カズヒコをふり返って、

「串カツ食うた連中、さぞ死人臭(しびと)かったやろナ。非衛生なこと、しよんねンなア、おまえらは。」

悪いことしよんねンなア、とは言わなかった。悪いことしたんやないから、これなら、ブタ箱に放りこまれずにすむやろ、……カズヒコは、十四歳の知恵でそう直感して、安心する。ニコッと白い歯のみえる笑顔で、若い巡査のほうへ、その好意に酬いる意味のおじぎをすると、

「おまえ一人でやったのか、お墓の花立て泥棒は。」

火のつきにくい手巻き煙草を、せかせか吸っていた、年とったほうの巡査が、そばからはじ

めて口をだした。
ナニいうとるンや、さっきこの坊主が二、三人とぃとぅを組んで、っていうとったやないか、……カズヒコは、だまって、よごれた鼻先をやけにこすりあげる。いっしょに寝起きしている友だちの、トックリの儀ィやんに誘われて、つい三日まえから仲間に加わったのだから、ほんとは仲間が幾人いるのか、そしてその顔ぶれが、どこのだれなのか、カズヒコはなにもしらない。
まずい手巻き煙草を途中であきらめた年とった巡査が、カズヒコをふり返った。
「墓場の花立てを引っこ抜いてきて、串にけずって、それで何ぼ儲かるンや。」
「二十本で、五円や。百本けずンのに、二日かかるねン。」
「指のさき、皮がむけるやろ。」
反射的にカズヒコは、切りきずや、竹のふしでひっ掻いた跡がまだなまなましい両手の指を、だまってさし出して見せた。
「えらい目して百本けずって、たったの二十五円か。アンパン五つ食うたらおしまいやないか。」
はじめは十本で五円に買ってくれたのが、いつか浮浪児の仲間でこのテを真似る者がふえ、

需給のかんけいが狂って、労賃が半分に下落したのだ。それに、串にする材料が墓場からだまって失敬してくる、元手いらずだとわかってから、串カツ屋のおっさんらに、あんじょう足もとを見られ、どんなに精だして〝製造〟したかて、安う叩かれ、百本二十円に値切られても泣き寝入りするしか、しゃァないンや、……儀ィやんはカズヒコを仲間にひき入れたとき、鼻の穴をほじくりながら、ぼやいたものだ。

年とった巡査は、のど仏が見えるほど大きく口をあけて、金魚のようにパクパクあくびをした。そして、お墓の花立てくらいでは、通りがかりに垣根の竹を引っこぬいたようなもので、軽犯法にもなるまいと思われるし、ましてこんな年はもいかぬ浮浪児が、取ってきた竹筒をじぶんらの労力で加工して串をつくり、それを売ってわずかなシャリ代のたしにしとったちゅうことになると、そこは仏心や、花立てをとられた仏はんたちも、おこってはれへんやろ、……独りごとみたいに言ったのが、突きだされたカズヒコにではなく、訴人である一迎寺の坊主に説教したような皮肉な結果になった。

「ほンなら、ナ、おまえらもう二度と、したらあかへんデ。」

舌うちといっしょに捨て台詞をのこして坊主が引きとっていくと、年とった巡査は手巻き煙草を、両掌でもみほぐしながら、カズヒコをふり返って、

「おまえら戦災浮浪児やのうて、かわいそうに戦災苦労児やなア。わしはおまえらに同情するけどナ、法律は法律や。何ぼ、めしのタネやいうても、よそさまのもン無断で取ったら、そら泥棒やちゅうこと、わかってるやろ。……よし。ほんならもう、去んでええワ。」

蠅を追うように、顔のまえで手を振った。

カズヒコは、ぺこりと音のするかんじで、首を折っておじぎをした。そのまま交番を出ようとして、ふと、足の向きを元にもどした。

「巡査はんのおじさん……おじさんは、何ちゅう名まえですか?」

「何や、浮浪児が巡査の身元しらべする気か。話があちゃらこちゃらやないか。」

何かの報告書を書いていたらしい若いほうの巡査が、水晶ペンの手をとめて笑った。

年とった巡査は、ようやく火のついた手巻き煙草で、ゆっくりと一服くゆらしてから、

「わしの名まえ聞いて、どうするんや。」

「ちょっと、ぼく、おぼえときたいよって。」

「おぼえといて、お歳暮でもくれるちゅうのンか。ふふ……そんなら、教えてやろ。わしの名は、スズキ、や。」

「スズキ、何ちゅう名ですか、下のほうは。」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com